

経験を有効に活用し成長につなぐ学習支援
 -経験学習モデルを活用したハリーコール症例振り返り-
 キーワード：成人学習 経験学習モデル 急変 シミュレーション教育
 ○中里さかえ 研井礼子(救急病床)

<はじめに>

当院は511床を有する2次救急医療施設である。ER型3次救急指定取得に向けた救急診療体制強化の一環として救急外来と救急病床の一元化が図られ3年目である。救急病床は一般病床であるが集中管理センター内に位置づいていることから、緊急度・重症度共に高い患者の入院がある。入院中急変することも多く、救急病床看護師は状態変化を予測した観察や急変時の適切な対応など、高い救急看護実践能力が求められる。

これまで急変事例の振り返りやフィジカルアセスメント学習会を開催し救急看護実践能力向上に取り組んできた。Knowlesは成人学習者の特徴として経験が自他の豊かな学習資源となると述べている。そこで成人学習者である救急病床看護師に対しKolbの経験学習モデルを活用してハリーコール症例の振り返りを行い、救急看護実践能力の向上を目的に取り組みを行ったので報告する。

<目的>

フィジカルアセスメント・急変対応を中心に学習を進め、救急看護実践能力を高める。

<期間>

平成27年4月～平成28年3月

<倫理的配慮>

研究的視点でまとめ、学会で発表を行うことをスタッフへ説明し同意を得た。

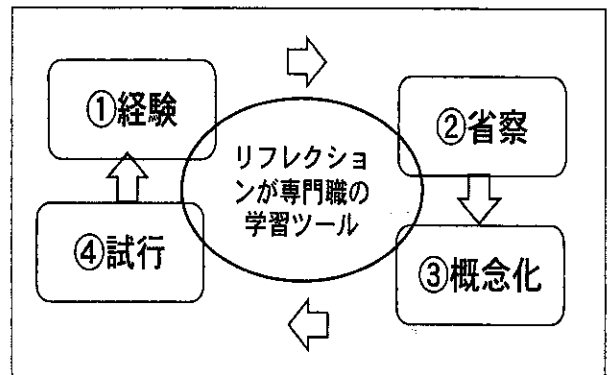
<方法>

Knowles, 1973は成人学習者の特徴を①学習者としての自己概念が依存的パーソナリティーから脱皮し自己管理性を増大する。②経験が自他の豊かな学習資源となる。③学習へのレディネスが生活上の課題や問題から生じる。④学習への方向づけが、学科中心から生活上の課題や問題中心へと変化しすぐに役立てたい。⑤学習の動機付けは、外部から与えられる報酬や処罰よりも、内発的な要因が重要となる。と述べている。特に下線の部分を大切に計画した。

1) 具体的な取り組み内容

- ①スタッフが学びたい内容で学習会の年間計画を立案、スタッフ主催で実施
- ②スタッフがインストとなり実際の急変事例をシナリオに4か月毎にBLS、ACLS
- ③急変事例の振り返り、ハリーコール症例振り返り、教育担当者が主催

図1 Kolb Fryによる学習サイクルモデル、1975 一部改編



ハリーコール症例をスタッフにとって大切な経験と位置付け、ハリーコール後リーダー医師と課題や要因分析を行い図1内の省察、概念化、試行計画を早期に立案した。

1) 事例紹介

A氏50歳代男性：アルコール性肝硬変、食道静脈瘤、肝性脳症
 食道静脈瘤破裂によるショックから心肺停止となりハリーコール要請、死亡退院となった。

①ハリーコールの要因・課題

胃液様嘔吐後頻脈、頻呼吸となったが、食道静脈瘤破裂の可能性やショック徴候の予測ができていない。

②A氏への急変対応における課題

環境調整、応援要請ができていない。BVMの酸素チューブ未接続。救急カート・AED・モニター装着など予測性を持った準備やアプローチができていない。救急科医師からは

「ダメダメだったよ。」というコメントであった。

③学習支援の実際

心停止前に急変前徴候があったことに気付いて欲しかったため省察として気付ikitレーニングを行い、一般的なバイタルサインの意味づけを行った。概念化としてA氏の状況を振り返る机上シミュレーションを行い、どの時点で何を行うことが出来ていたか、気付ikitレーニングで気付いたことを言語化した。その後試行として言語化した内容を行動化する実践シミュレーションを実施した。気付ikitレーニングの途中から、「あーあの時あれをしておけば良かった。」と気付ikit、「次に同じようなことがあったら絶対こうしよう」とペア看護師で話し合い、イメージトレーニングを続けていたとの意見が聞かれた。気付ikitレーニングを受けたスタッフは実践シミュレーションで、CPAを回避するアセスメント・行動をとることが出来ていた。これは省察から概念化を通して自ら気付ikit考えたことで学びが深まった結果と考える。

2) 事例紹介

B氏 70歳代男性、右化膿性扁桃周囲炎
縦隔炎から気管内腔粘膜腫脹、CO₂ナルコーシスとなり呼吸停止ハリーコール要請、死亡退院となった。

①ハリーコールの要因・課題

SP0₂モニターは出来ていたが、呼吸回数の観察不足。医師への報告時緊急性が伝わり難かった。記録に記載間違いがあった。

②B氏への急変対応における課題

救急科医師からは「できてたよ」というコメントであった。記録に不備があった。

③学習支援の実際

呼吸回数を観察しアセスメントを行う大切さに気付ikit欲しかったため、省察としてCO₂ナルコーシスの学習会を行った。アセスメントした内容をどのように報告すると緊急性が伝わるか、概念化としてはB氏の事例をもとに報告シミュレーションを行った。試行として記録のシミュレーションを実施した。「ハリーコールの後ずっともやもやしてたけど、すっきりした」といった意見があった。

一年間にICLSを2名受講し、ICLSタスクとして2名参加した。現在、他部署のハリーコール時には積極的に応援に行き、記録の役

割りを担うことができている。

成人学習者の特徴を意識し、一貫して指摘するのではなく省察に必要な知識を提供することを心掛けた。自ら気付ikitすることで内発的な動機付けとなり行動変容(急変対応技術の向上や研修参加)に繋がったのではないかと考える。4か月毎にBLSやACLSを繰り返したことで急変対応ができていたと救急科医師からの評価も変化したと予測できる。

<まとめ>

- 1、指摘するのではなく、省察に必要な知識を提供することで気付ikitにつながる
- 2、自ら気付ikitすることで内発的な動機付けとなり行動変容(急変対応技術の向上や研修参加)につながる
- 3、急変対応向上には定期的なBLS研修が必要

<課題>

事例はスタッフにとって大切な経験と捉え、タイムリーな振り返りを継続することで救急看護実践能力向上を目指す。